

或る夜のできごと

新庄 よしこ

よるになつてまつ暗な時に、

幼稚園の物置のすみつこでこんな話聲がきこえます。
ます。

兄さん鼠と妹鼠と。

「ちうちやん、ちうちやん、ちよいと」

「なあーに、兄ちゃん」

「何だか變な音がしやしないかい」

「おお、こはい、なんでせう」

「なんでも、きやろくくつてきこえるの」

「こはい、兄ちゃん」

「そら、きこえるだらう、しづかに、しづかに」

妹、耳をすましてききます。

「あら、ほんと、私にや、けつけつけつてきこえるけど」

「そうかい、いろんなふうにきこえるんだね」

妹は兄にかちりつきました。二匹の兄妹鼠はちつと又うづくまつてきいてゐました。

ほんとに、ときく聞えます。

たしかに幼稚園のどこの室できやろくともけつつけつともきこえます。

兄さんは決心しました。

「僕、行つて見てくる。」

「あら！ 見に行くの！」

「うん、だつて、僕、何だか見てくる」

「おばけかしら」

「今頃おばけなんか居てたまるかい、大丈夫だ」

「だつて、氣味がわるくて、私行くのいや」

「いやならおよし、一人で待つて来る」

「ぢや兄ちゃん、棒か何か持つて行くといい、もし怖いものだつたら大急ぎで逃げていらつしや

いね」

兄さんは割箸を一本しつぽにからんで、そいつとそきやろくくけつけつ音の方に出かけました。

一番目の室は何にもきこえません。

二番目の室も、

三番目の室で、丁度鼠がその室に行かうとした時にきやろくくが始まりました。兄さんは思はずドキツとしましたが一生懸命強くなつてしばら

く様子をきいてみました。

その時又きやろくくどうも怖い様でもありません。兄さんは段々氣が大きくなつて鍵の穴からそいつとのぞいて見ました。

そこには思ひもよらないものが居ました。

「なあんだ、蛙だ、蛙だ、一體どうして來たのだらう」

ちよろくくかけて妹のところに行つて、

「ちうちやん、く、何でもないので、蛙だよ、蛙だよ」

「あらそう、なあーんだ、私、蛙なんかちつとも可怖かないわ、私より小ちやいもの、どこなの」

「あの、コロンくくつていふ音がするものがあるだらう、ピアノとかいふものね、あの室だよ、こゝから三番目の」

「だけど、どうして蛙なんか居るんだらう、行つてきいて見ませうよ、二人で」

廻轉窓のすき間から兄妹はする／＼と室にはいりました。

蛙はびつくりして、びよこん／＼とあつちへまご／＼こつちへまご／＼してゐます。

「あの、かへるさん、私達はこはくないのよ、いぢめないのよ、おはなししませう」

「そうですか、ほんと、かぢりやしないの」
「大丈夫、安心してこつちへいらつしやい」

鼠と蛙はお話します。

「どうしてこんな所に來たの、かへるさん」

「私、さつき蛙になつたばかりなんです」

「あらおかしい、變ね、どうして」

「どうしたの君」

「今朝迄あの硝子のおけの中にはいつて居たおたまじやくしなんですよ、それがね、おひる頃から何だかかう體中に力が一ぱい出て、急に飛んで見たくてたまらなくなつたので、一二のさーんで飛び

出して見たらもう蛙になつて居たの」

「へえー！」

「とび出してびよこん／＼飛んで見たけれど、どこに行つたらいゝかと思つて寂しくつて／＼泣いてしまつたんです」

「まあ、まるでおはなしのようね」

「それぢや君、こゝの幼稚園には先から居たんだね」

「えゝ、始めはどこかのお池の中に居たら誰かがここへ連れて、この柵の上にもうずる分長く居ました。毎日／＼お子さん達にして居る事ようく見て居たの」

「そう」

「今迄はお友達と一緒にだからよかつたけれど、私が一番先にかへるになつたものだから、どうしていゝかわからなくつて泣いて居たんですよ」

「ぢや、お池に連れていつて上げませう、こつちへいらつしやい」

藤棚のそばの、金魚や龜の子の居るお池に蛙を連れて行つてやりました。